

匹見町埋蔵文化財調査報告書第24集

塚ノ町遺跡

平成10年3月

島根県匹見町教育委員会

匹見町埋蔵文化財調査報告書第24集

塚ノ町遺跡

平成10年3月

島根県匹見町教育委員会

例　　言

1. 本書は、島根県益田農林振興センターの委託を受けて、匹見町教育委員会が平成8年度に行つた道川地区県営圃場整備事業に伴う、塚ノ町遺跡の発掘調査報告書である。

2. 調査は、島根県教育委員会文化財課の指導と協力を得て次のような体制で実施した。

調査主体　匹見町教育委員会

調査員　渡辺友千代（匹見町教育委員会文化財保護専門員）

調査補助員　栗田美文　中井将胤　大賀幸恵

　　渡辺美鈴　大谷真弓

調査指導　島根県教育委員会文化財課

　　中村友博（山口大学人文学部教授）

事務局　斎藤惟人（匹見町教育委員会教育長）

　　渡辺隆（匹見町教育委員会次長）

発掘作業員　栗田定　森脇雅夫　渡辺照　斎藤直行

　　渡辺勉　長谷川時子　溝田久子　山崎リマヨ

　　大谷孝子　塙道富美枝

3. 調査に際しては、益田農林振興センターをはじめ、島根県教育委員会文化財課に終始多大な協力をいただくとともに、山口大学人文学部の中村友博教授からも一方ならぬお世話をいただいたことに対し、ここに合わせて感謝の意を表したい。

また、発掘現場においては、土地所有者の竹田幸正氏、そして圃場整備事業の推進委員長である河野裕氏にはご理解とご協力を得て、ここに無事発掘調査を終えることができたことに対してお礼を申し上げたい。

4. 今回の調査において、現場あるいは編集に利用した現地地図は、匹見土地改良区のご協力を得た1/1000縮尺のものであり、調査地点図は縮尺1/25000を使用したものである。なお標高測量は株式会社ワールドの協力を得て行った。

編集にあたっては、中井将胤・大賀幸恵・大谷真弓氏らのご協力を得て、執筆は渡辺隆・渡辺友千代・栗田美文・（末文に示す）が各担当し、編集は渡辺友千代がこれを行ったものである。

目 次

第1章 発掘調査に至る経緯と経過	(渡辺 隆)	1
第1節 発掘調査に至る経緯	1	
第2節 発掘調査の経過	1	
第2章 地域概観	(栗田 美文)	2
第1節 地形的立地	2	
第2節 地域環境	5	
第3章 調査の概要	(渡辺友千代)	9
第1節 はじめに	9	
第2節 調査区の設定	9	
第3節 層序と層位	11	
1. 基本的層序	11	
2. 層序と層位の状況	12	
3. B調査区ほかの状況	13	
第4章 出土遺物	(渡辺友千代)	14
第1節 はじめに	14	
第2節 実測遺物	14	
1. 繩文土器	14	
2. 石器類	15	
3. 陶磁器類	15	
第5章 小 結	(渡辺友千代)	16

挿図・図表目次

第1図 遺跡位置図	1
第2図 遺跡位置と周辺遺跡分布図	3~4
第3図 調査区と周辺地形断面図	6
第4図 調査区配置図(1)	7~8
第5図 調査区配置図(2)	10
第6図 上層図	11
第7図 B調査区と平面遺物分布図	12
第8図 土器火測図	14
第9図 石器実測図	15
第10図 陶磁器類実測図	15
第1表 出土遺物集計表	14

図版目次

図版1	(a) 発掘調査区遠望(南東から)
	(b) 発掘作業風景(北西から)
	(c) 東・西方向の十字トレンチ(西から)
図版2	(a) 南・北方向の十字トレンチ(南から)
	(b) 十字トレンチ(南・北方向)の北半部の堆積状況(西壁)
	(c) 十字トレンチ(南・北方向)の南半部の堆積状況(西壁)
図版3	(a) 十字トレンチ(東・西方向)の東半部の完掘状況
	(b) 十字トレンチ(東・西方向)の西半部に出土した石器
	(c) A区の焼土出土と完掘状況(西から)
図版4	(a) B区の礫石群(南東から)
	(b) B区の完掘状況(東から)
	(c) 出土した縄文土器・石器類・陶磁器類

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

本遺跡は、島根県美濃郡匹見町大字道川イ312番地ほかに所在するもので、平成7年11月初旬から12月下旬にかけて行った岡場整備事業に伴う詳細分布調査において、判明したものである。^(註1)

ただし、その分布調査においては河寄りであった、というためのものだったのか、数度のオーバーフローしたと思われる円錐層を呈した層位に数点の縄文遺物が散見されたのみであった。

第2節 調査の経過

分布調査の結果から、一応遺跡であることが判明したため、平成8年3月8日に文化庁宛に発掘調査の通知を提出し、現地調査は同年4月8日から実施したのであった。

調査は分布調査でのオーバーフローという搅乱的要素がみられたため、本格調査ではやや東寄りの山裾側に移動させ、その性格や全貌を把握すべく努めたが、企及したほどの成果はなく、同年7月4日に現地調査を一応中断することにした。そして翌日、7月23・24日には山口大学人文学部の中村友博教授、また県文化財課の広江保護主事に来跡を招請し、今後の指導を願う。その結果、これ以上続行しても良い結果は得られないだろう、との意見に従い終了(7月4日)することにしたのである。



第1図 遺跡位置図

(渡辺 隆)

[註1] 匹見町教育委員会「匹見町内遺跡詳細分布調査報告書」、1996

第2章 地域概観

第1節 地形的立地

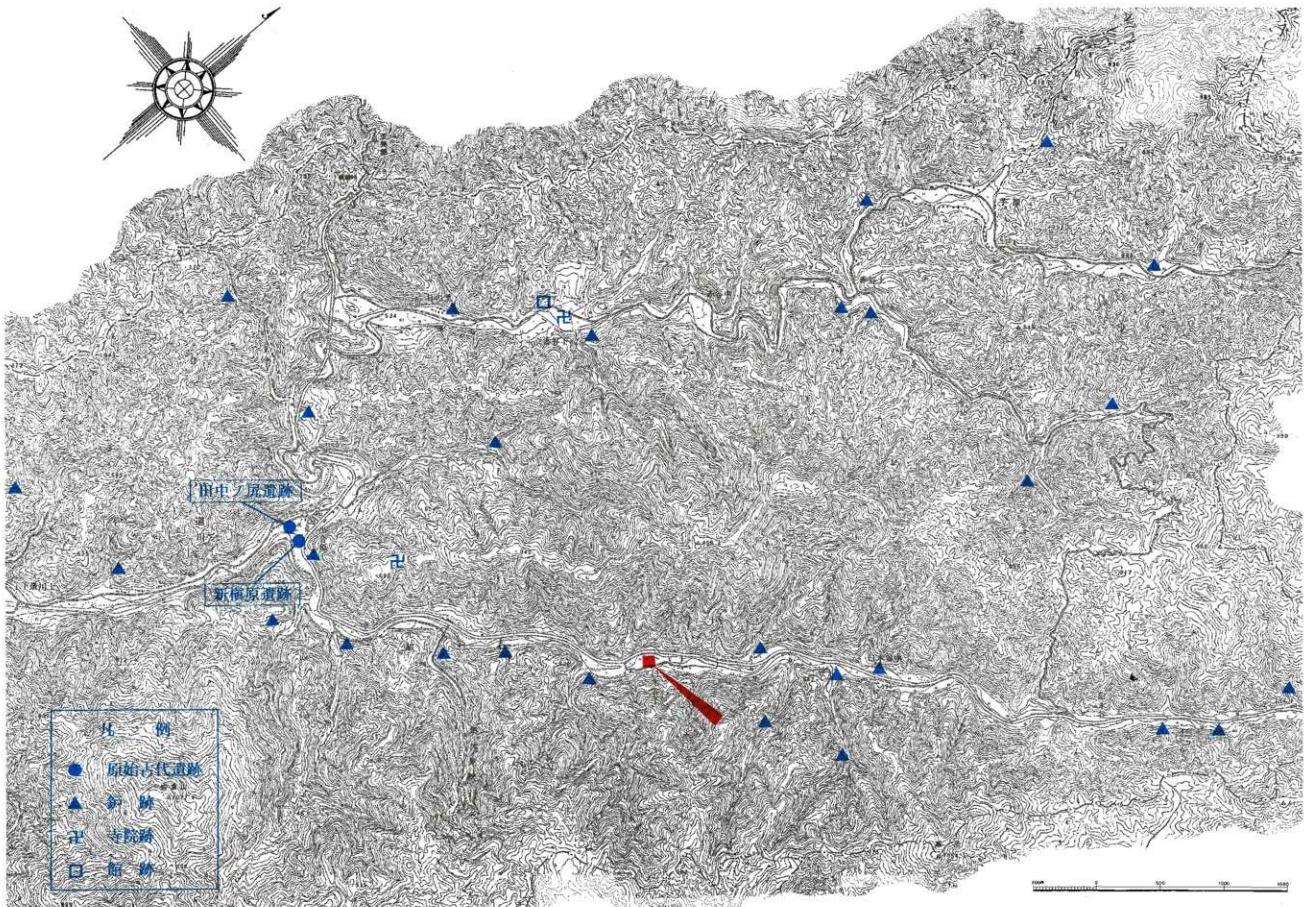
本報告する発掘調査地は、字名を塚ノ町と称する島根県美濃郡匹見町大字道川イ312番地ほかに所在する。

その所在する匹見町は、県の南西端に位置し、その南東側には広島県と境をなす標高1000m内外の中国脊梁山地が北東—南西方向に連なり、その南端の一部は山口県とも接境をなしている。一方、北東側には弥歛山（961m）を境として島根県の那賀郡、そして対向する南西側には安蔵寺山（1,263m）を挟んで鹿足郡、また北西側は益田市及び同郡内の美都町と接しており、その境界線は118.5kmにも及んでいる（第1図）。

こうした町域を貫流する匹見川は、北東の脊梁山地に所在する標高989mの嶺に源を発し、南西方向に走る山地に沿って、町中央部へ流れて紙祖川などの各支流をあつめて北西へ流路をとつて、益田市に流下しているのである。またそれらの流域には狭長な河岸段丘が形成されており、その段丘面の僅な平地には耕地がみられるのにすぎない。そういう典型的な山間地である本町の総面積300.28km²あって、その92.2%は山野で占められているのである。

今回、調査対象とした塚ノ町遺跡は、匹見町の北東部にあたる道川地区に所在する。その地区は、南東側に高岳（1,054m）・岩倉山（1,022m）・広見山（1,186m）などの高位な山岳が北東から南西方向に屹立し、その背後の広島県境には県下最高峰である恐羅漢山がひかえ、それに対する北西側にも同様の標高800m内外の山地が連なっており、北東から南西方向に長い地形をなしている。またこれらの地形は中世代白亜紀の火山活動によって生成されたといわれ、流紋岩質凝灰岩を主体とする幅8~15km、延長100kmにおよぶ匹見層群とよばれる大地溝帯から成りたっているのである。そしてその地溝帯は本地区において白木谷断層と俗称されており、脊梁山地に沿って北東から南西方向に走っている。さらにその北西側の赤滝山・古原と呼ぶ山地を越えると、そこは赤谷という地区で、やはり同一方向に伸びる中規模の波佐・赤谷断層が貫層しているのである（第2図）。したがって本地区的河川は、その2つの地溝帯に支配され流下しているのである。それは白木谷地区を流路する本流匹見川であり、そのもう1つは空山（1,060m）を源流とする赤谷川である。この2川は、上流域では南西方向に並流し、その支流は中流域において南東に転じて本流の匹見川と合流し、沖積地をつくりながら下道川をくだり、さらにV字峡谷（表匹見峠）をぬけて町中央部へ流れているのである。

そういう立地下にある本遺跡は、本流匹見川の上流域の左岸にあって、標高約540.27mの水田に位置する。そこは約40m北西側には匹見川が周流し、対向する北東側約70mには山裾がせまっている。また北東—南西方向には、匹見川が形成した河岸段丘が約6mの比高差をもって狭長にのびている。このように匹見川の左岸に形成された段丘面は、その大部分は水田と化され、民家は南東面の山裾に数軒みられる。また南西流する匹見川の対岸の山裾には、国道191号線が貫道しているのである（第3図）。



第2節 地域環境

該当地区は、南東面の中国背梁山地が隔壁となっているため、気象は著しく変化し、年間を通して雨季が長く、中国地方でも多雪・最多雨に属し、年平均気温は13℃と涼涼である。このような風土が影響して春のおとずれは遅く、4月の上旬にはコブシの花をさきがけとしてサクラ・モモ・ナシなどの花が一時に咲き乱れるのである。また標高400~1,000mの高低差をもつ山林には、温帯林を主体とする落葉広葉樹、例えばクリ・ナラ・ホウ・トチ・ムク・カエデ・シデ・サルスベリなどが豊富に繁茂している。そして標高800m以上になると、山頂まで冷温帶林のブナ帯で占められているが、一方、低地の河川沿いにはカシ・ツバキ・サカキなどの照葉樹も混生している。しかし、現況は広葉樹林が破壊されつつあり、2次林としての人工林、スギ・ヒノキなどの植林地と化しているのが現状である。このような樹林帶には、ドングリ・トチ・クリなどの堅果類、根茎類としてユリ根・ヤマイモなどの豊富な植生にあり、それを主食とする小中動物が数多く見られ、例えばクマ・イノシシ・タヌキ・ムジナ・テン・イタチなどの哺乳類や鳥類はしかりで、そして河川には鮭鱒属のゴキ・ヤマメといった冷水の魚類も生息している。つまり動物たちが生態系を維持してきた背景には、こうして落葉広葉樹が広がっていて、いまだにその豊かな自然がこされているからと考えられる。

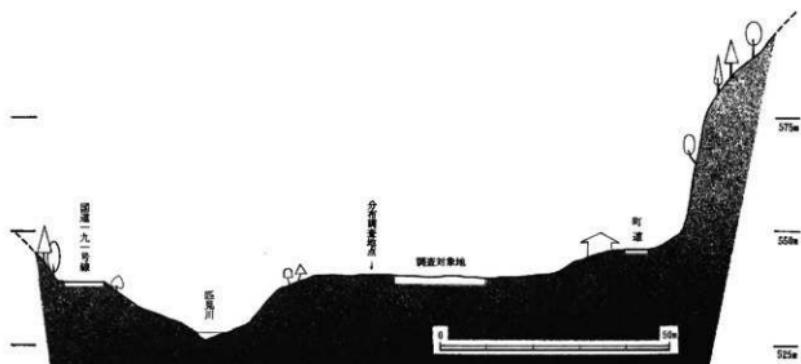
このような豊富な山林に覆われる本地区的生業は、第1次産業を中心とした、つまり農林業に支えられてきたといえる。とくに藩制期には藤井氏によって、この豊富な山林を製鉄用炭材林として最大限に活用され、鍛業を発展させたのである。その製鉄遺跡は、谷の出合いに多く分布しており、現在その遺跡は37ヶ所が確認されている（第2図）。それは本町においての50%を占めており、本地区で盛んに行われていたことを裏付けているといえるであろう。また、このように該当地には良材が多かったとみえ、木地師による各種の木地品が生産されていたらしく、“ろくろ小屋田・木地屋原・木地屋敷”という地名から窺われる。この木地師たちは「木地屋登録兼奉加帳」によると、寛文5年～文政13年の間に70余名が入山したことが記述されており、山地が漂白民である木地師たちの隔絶した生活地であったことを物語っているといえる。一方、地元民たちは山地・山裾を利用し、瘠地を焼畑に利用する一方で、ミツマタ・コウゾを植培し、とくに手漉和紙（石見半紙）の生産を行っていた。彼らは、このような山林地帯を生活の糧とし、その山地の利を最大に活して営んでいたことが窺われる。そして鍛業と併用して行なわれてきた製炭は、明治・大正・昭和時代とひき継がれたが、その山の経済活動も振わなくなつてゆき、現在戸数78、人口223となり、典型的な過疎地区となつていったのである。

こうした山に向かれた生活誌は生業のみにとどまらず、信仰とも深く結び付いて営まれてきたことが窺われる。それは生きる糧を山地においていた人々は、その山地を聖地として崇拝し、心の支えとして生きてきたのである。つまりそういった信仰は数社の大元社にみられ、その源初の信仰は山に鎮まる祖靈であったのである。しかし、その信仰も山地から平地への生業の変異によって、祖靈的要素を失い、地域神として作神・農耕神へと変異していった様子がよみとれるのである。そのような祖靈信仰の大元社は当地区において4祠みられるが、最も多いのは河内社であり、それら

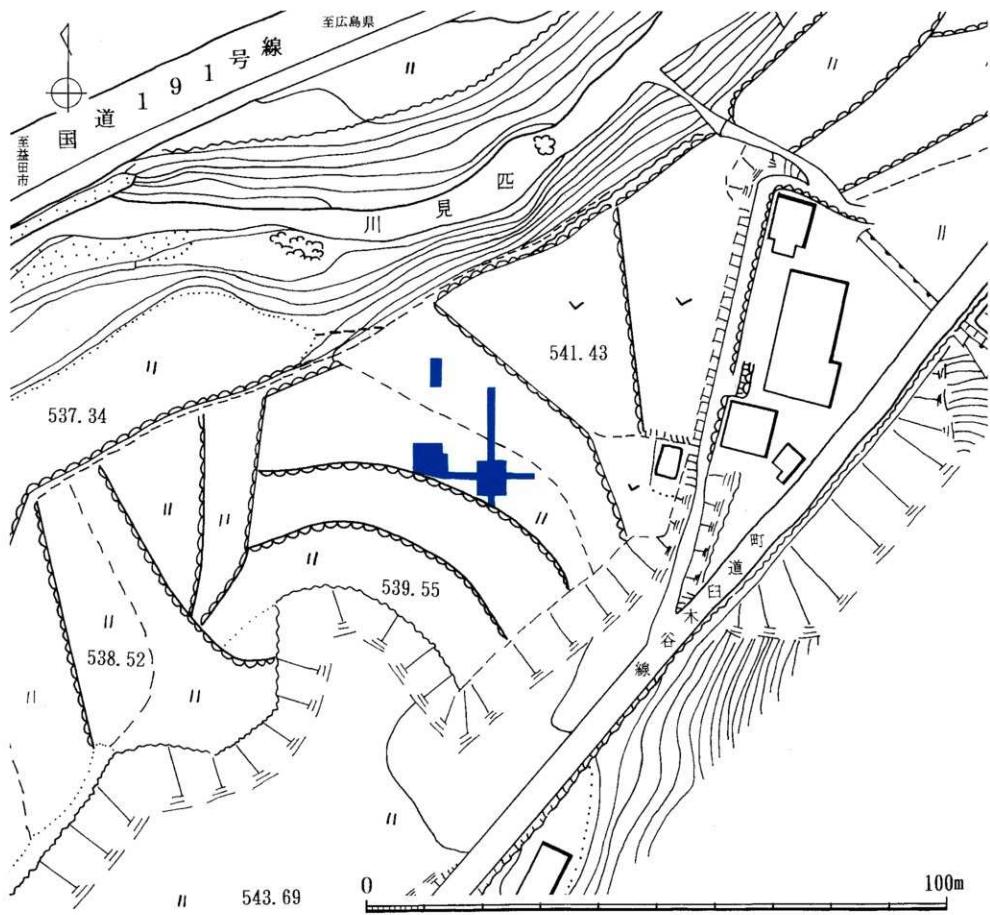
からその生業基盤は農耕であったことには違いないのである。一方、鍼の護り神として金屋子神も1社みられ、また航海の安全の守護神の金比羅宮や、あるいは宮島系の4社も在存して地域色があらわれているのである。一方でそうした山陽側に多く分布する信仰がみられる背景には、該当地が山陽側に接していることにより、山陽側から地域交流が盛んにおこなわれてきたことにあるといえる。例えば、栗栖・河野・竹山（武山）などの姓氏は、戦国期に瀬戸内海沿岸から奥山に勢力を及ぼした小豪族たちで、その末裔が越境して土着したものであったと考えられる。それらの諸々がもたらした移植文化といえるものの影響は大きく、それは生活の立て方・風習・方言にまで及び、本地区的地域色を形づくっているといえる。

このような環境下にある本地区的原始古代遺跡は、数年前からの圃場整備事業に伴なった調査などで、徐々に解明され増加してきているのである。今回の調査地点の2.5km下流の赤谷川との相会地には、県史跡である先土器から縄文時代前期までを包含する新横原遺跡があり、その対岸約100mにも集石炉・配石墓（先土器から縄文時代前期）が確認された田中ノ尻遺跡が分布している（第2図）。また、その下流域の下道川においては、町指定の縄文時代後期の上家屋遺跡や配石墓が検出された前田中遺跡がある。またその南東側を北東に延びる丘陵地の山上には、中世期の山城である道川城跡・小丸山城跡などが存在しているのである。

（栗山 美文）



第3図 調査区と周辺地形断面図



第4図 調査区配図(1)

第3章 調査の概要

第1節 はじめに

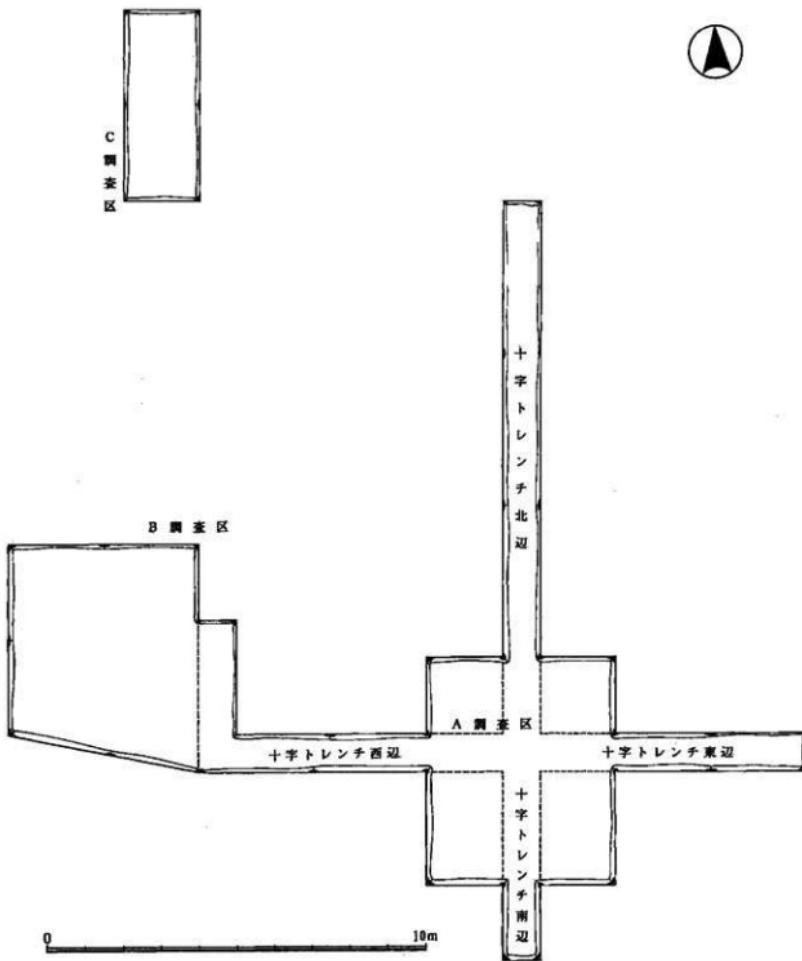
匹見町大字道川イ312番地ほかに所在する本遺跡は、40m北西側に匹見川本流が「C」形に周流し、その形状の内側に当る河岸段丘に立地し、地名は塚ノ町と呼ばれている。その地点は、南西流する匹見川の左岸に辺り、狭長な河岸段丘を形成して主に水田と化されているが一方、右岸は急峻な山地が匹見川までせまり、そこを山陰と山陽とを結ぶ国道191号線が貫道している（第3図・第4図・図版1-a）。

平成7年度に行った分布調査では、匹見川との比高差約6mを測る河岸端（河畔から15m地点）に調査区を設けて行ったが、上器は伴わず、数点の石器剥片ばかりであった。しかもそれらの大半の剥片は、表土である水田耕作土中から出土したものであった。また、各層序においても匹見川によるオーバーフローを呈した様相であったことから、本格調査では、やや低位であった南東（山裾寄り）側に約20m余り移動させて、その地点の真意を探ろうとしたのである。

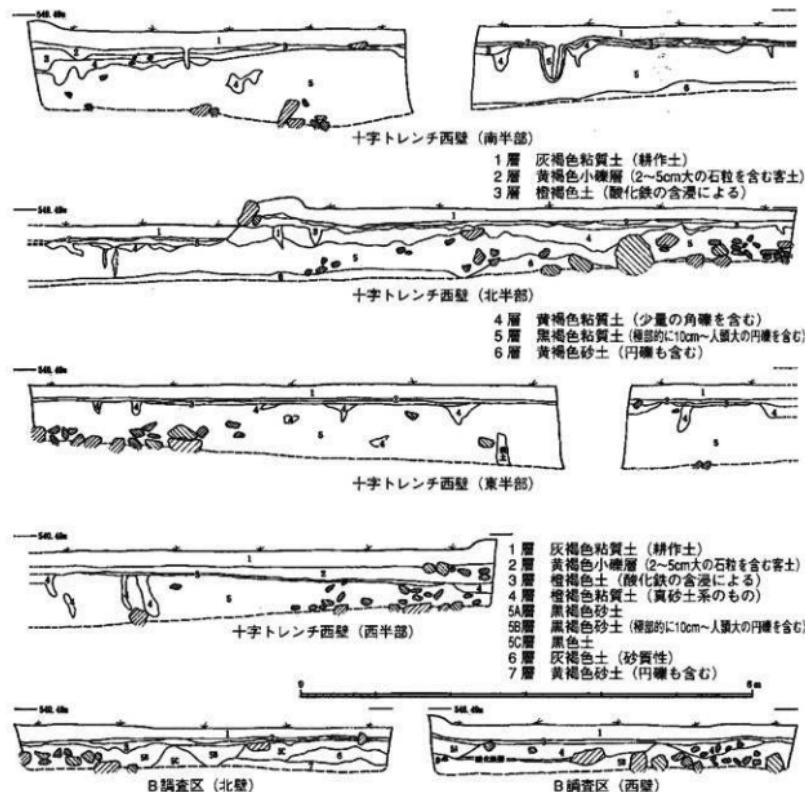
第2節 調査区の設定

調査区の設定については、基本となる起点の杭を定めることから始めることにした。その基点は、匹見川と山裾との約350mの幅をもつ河岸段丘面のほぼ中央辺りに、そして水田の形状も加味した上で、任意に定めた。そしてその基点をもとに、磁北方向に100mを測り、幅1mのトレンチをまず設けたのである。一方、東一西方向には、基点から磁北方向の5mを測った地点に、幅1mのものを東方向に8mのものを設定し、西方向にも同様な計測を行った。ただし西方向の端部からは、さらに磁北方向に3mを測るものを別途に設けたのである。これらの設定したトレンチは、やや異形を呈しているものの、凡そ区形が十字状であるので、これを十字トレンチと称することにした。調査は、この十字トレンチから層序または遺物の分布状況などを把握するために、まず掘削を開始することにしたのである。その結果、北一南、東一西方向の交叉地点の4層上面に焼土塊が確認されたほか、また東一西方向の西端部の5層には石器剥片の1点が検出された。よって、その地点を中心とした調査区を設ける必要が生じたのであった。

その1つは十字トレンチの交叉した地点のもので、それは磁北方向に6m、東一西方向に5mを測った、30m²のものとしたのである。そして東一西方向の西端部のものも、前者と同様な計測を行ったが、ただ南辺部は水田の石垣築地となっていて思慮通りにはいかなかつたため、その畦畔に沿う形で、左辺部は5m地点で結ぶ、という変則的な区形を設けた（第5図）。これらの2つの調査区は、前者のものをA調査区といい、後者のものをB調査区と呼ぶことにした。なおこの時点で、余地がのこっている北東面側にも調査区を尋いで設けることにしたのである。それはB調査区から磁北方向に9mを測った地点に設定することにし、つまり幅2m、長さ5mを測るC調査区と呼称するものを設けたのである（第5図・図版1-a）。



第5図 調査区配置図 (2)



第6図 土層図

第3節 層序と層位

1. 基本的層序

本遺跡の基本的層序は、河寄りの北側より山裾寄りの南東側の方が妥当であると考えられた。それは河寄りであったためのものであろうか、北西側は匹見川による数次におけるオーバーフローの影響を受けた形跡が認められたからである。したがって、ここではオーバーフローの影響を余り受けていないと考えられる南東側の層序を基本とすることにする。

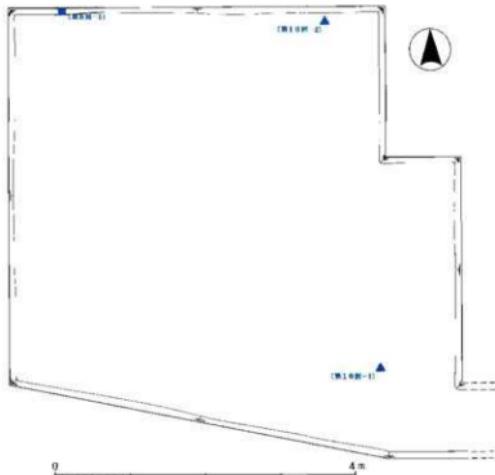
それは表土から下層へと順にみていくと、1層の灰褐色粘質土、2層の黄褐色小砾層、3層の橙褐色土、4層の黄褐色粘質土、5層の黒褐色粘質土、6層の黄褐色砂土と堆積していた（第6図・図版2-a・b）。これらの層序を基本（十字トレンチ）として、その堆積状況などについて、以下、具体的にみていくことにする。

2. 層序と層位の状況

まず表土である1層は、水田耕作土である。その層厚は16~24cmを測って、20cmばかり高位の北側に向っては浅層となり、その逆に南辺側は厚かった。つぎの2層は、黄褐色をした5cm大までの小礫を含んだ心土層としての客土である。厚いところで5・6cmあったが、尖滅部分や欠除しているところもあり、一様ではなかった。とくに尖滅や欠除部分は北半、また東半にみられたのである。これらの1・2層からは混入したと想定される数点の石器剥片のほか、主に近世期の陶磁器類が出土した（第1表）。

3層は、酸化鉄が含浸した橙褐色した層位である。その上面部は上位層（1・2層）に沿って、比較的平坦であるが、下面部は含浸差がはげしく、その層界は凹凸する。層厚は、凡そ3~15cm程度であるが、尖滅や欠除部分もみられる。4層は、黄褐色をした粘質土であった。その層厚は、厚層部で約30cmを測り、とくに高位であった上流の北東側でみられ、一方、南西・西側は尖滅あるいは欠除部分もあって、全体に浅層となっていた。また本層には一部角礫もみられるなど、層状あるいは土質から判断すると、山地からの流入堆積土ではないかと捉えられた。そのためか、凹見川のオーバーフローを受けた可能性の強い東・南東側では捉えることができなかつた層位であった（第6図のB調査区）。なお本層からは遺物・遺構とも出土しなかつた。

5層は、有機性の堆積土と考えられる黒褐色した粘質土である。その層厚は40~100cmを測って、本調査区では最も厚い層位である。とくに南半部は厚く、その反面、北側に向っては薄くなっているとともに、また川寄りの西側や山裾寄りの東側へは薄く、礫も多くみられた。なお、本層では下位面を中心にして、縄文時代のものと想定される石器の剥片が数点検出されているが、遺構らしきものは確認することはできなかつた。しかし本層には、そのほか焼土や炭化物も検出されていることから、遺構も存在した可能性が高いが、同一層内ということもあるあってか、見逃してしまったものと思われる（遺物の些少からみて、遺構はなかったのかも知れない）。6層は、黄褐色した砂土層である。しかし砂土層といっても、一部には円礫も含んでおり、実質的には河床礫層といえるものであり、本遺跡の基盤層にあたるものである。



第7図 B調査区と平面遺物分布図

3. B調査区ほかの状況

B調査区は、分布調査を行った地点の南東側に位置するもので、その層序状況は前述したものとは異なり、どちらかというと、分布調査での層序と類似したものであった。おそらく、これは匹見川のオーバーフローなどの影響を多分に受けたためだろうと考えられる。その層序は、1層の水田耕作土（灰褐色粘質土）、2層の客土（黄褐色小礫層）、3層の橙褐色土、4層の橙褐色粘質土、5層の黒褐色～黒色土、6層の灰褐色土、7層の黄褐色砂土の順で堆積する（第6図・図版4 A～b）。

このうち3層と4層の橙褐色土は、色調においては類似するものの、土質的には異なり、前者は酸化鉄の含浸によるもの、後者は真砂質のものであって、いずれも自然的堆積土と捉えられるものであった。また5層は、層状や色調から3つ（A～C）に細分したが、実質的にはトレンチやA調査区における5層黒褐色粘質土に順層するものと想定できる。そして円礫あるいは砂土を呈していた状況からは、A調査区などに比べて、河沿であったことによっていると捉えた。このような影響（オーバーフロー）が、本調査区における各堆積層位を浅層にしている原因ともなっていると考えられるのである（図版4-a）。なお、本層からは縄文土器片1点（第8図・図版4-c）が出土しているものの、遺構は検出できなかった。6層は、灰褐色土である。本層は北東側で部分的にみられたもので、オーバーフローの影響がみられなかった他の調査区では捉えることができなかつた層位である。したがって、それはオーバーフローなどの影響によって、醸成されて成った層位ではないかと判断されるのである。なお、その下位の7層は、基盤層としての円礫を含んだ黄褐色砂土であった。これらの6・7層では遺物も遺構も検出されなかった。

（渡辺 友千代）

第4章 出土遺物

第1節 はじめに

本遺跡での出土遺物は、総数68点であった。これを地区別にみると、十字トレンチが31点、A調査区が17点、B調査区が16点、C調査区の4点であった。また種類においては、陶磁器類の55点、石器類の5点、縄文土器類の4点、須恵器の2点となる。そして、これらを出土層からみると、陶磁器・須恵器類は1・2層、縄文

土器及び石器類は主に5層の黒褐色粘質土であったのである。これらの出土遺物をとくに特徴的あるいは形態的にみて、捉えやすいと判断したものを数点抽出して、以下みていくことにする。

なお陶磁器類の位置付けなどについては、広島県立美術館の村上勇学芸員に教示いただいたものである。

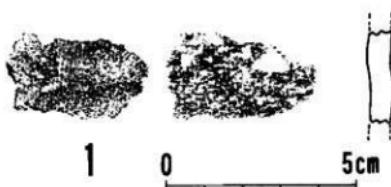
第1表 出土遺物集計表

調査区	出土層位	土器片	石 鐵	石器剥片	礫 片	須恵器片	陶磁器片	焼 土	炭化物
十 字 ト レ ン チ	1層				1		16		
	2層			1 (安山岩)	1		8		
	5層	3			1			(多量)	(多量)
A 区	1層						8		
	2層					1	8		
B 区	1層						8		
	2層					1	3		
	4層		1 (黒耀石)						
	5層	1							
C 区	1～2層						4		
合 計		4	2	1	2	2	55		

第2節 実測遺物

1. 縄文土器（第8図・図版4-c）

本片は、B調査区の5層（黒褐色粘質土）に出土した粗製系の縄文土器である。内外面ともナデ調整で、器肉は8mmを測ってやや厚手。外面の色調は淡赤褐色、また内面はコゲが付着して黒褐色を呈する。胎土には2mm大の石英を含んでいたが、焼成は堅緻である。なお縄文土器であることは、調整方法や焼成、あるいは色調などから判断できるが、どの時期に属するものかについては判らない。



第8図 土器実測図

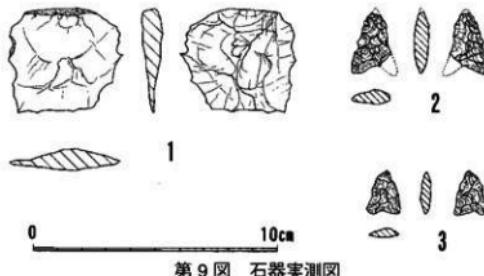
2. 石器類（第9図・図版4-c）

1は、A調査区の5層から出土した石器剥片で、石材は凝灰岩質のもの。背面には1打撃による打痕のみであるが、腹面側には周縁部からの数打の打裂痕がみられるとともに鋭利であるが、2次加工はない。2・3は石鎌。このうち2は、B調査区から出土した黒耀石（黒褐色）製の石鎌である。ややすんぐり形で、厚さは5mmを測りやや厚手である。3は、玄武岩質のもので、灰色に風化する。丁寧に背まで細部剥離を施しているが、材質のためか、美形のものとはいえない。

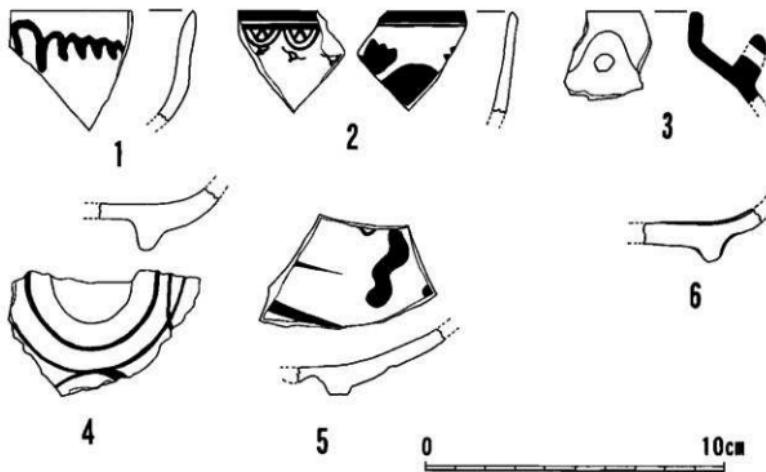
3. 陶磁器類（第10図・図版4-c）

1は伊万里焼の碗で、19世紀前半のもの。2も同じ伊万里焼で、19世紀から20世紀初めのもの。3は、陶製の土瓶で、19世紀前半期のものと思われるものである。4は、伊万里焼の陶胎染付碗の底部で、18世紀前半のもの。その本点は備前陶磁で、いわゆる木原唐津と呼ばれているものである。また5は唐津焼の皿で、16世紀最末から17世紀最初期のものである。6は、中国製青磁皿で、14世紀のもの。釉は比較的厚く、淡緑色を呈している。

(渡辺 友千代)



第9図 石器実測図



第10図 陶磁器類実測図

第5章 小 結

本遺跡は、平成7年度の分布調査で確認されたものであるが、当地点においては匹見川によるところのオーバーフローと想定できる攪乱的様相を呈していたため、隣接した山裾（南東）側に移動して実施したものであった。しかし本地点においては、一部の西端は別にして、その層序的堆積の仕方にはその影響はみられなかったものの、逆に遺物の散布は僅少で、そこには遺跡の性格あるいは生活誌などは把握することはできなかったのである。以下そのことを踏まえ、若干のコメントを付け加えておくことに止めたい。

本遺跡の出土遺物における分類は、大別して3種類であった。それは縄文上器、石器類、陶磁器類である。このうち少量の土器や石器などの縄文遺物は、5層の黒褐色粘質土に包含していたものである。該当期に伴う遺構も検出できなかったことから、また酷少の出土遺物からみても、当遺跡の本命は、オーバーフローによって攪乱を呈したとはいえるものの、その出土点数からも分布調査地点域であったことが想定されるようである。

また、陶磁器類では最も多かったのが19世紀後半期のもので、それは伊万里系のものが多かったのである。そして数点に16世紀後半期のものとつづき、14世紀のものと思われる中国製青磁は1点で、他にはみられなかった。これらの陶磁器類は、後世の人为層ともいえる1・2層に出土したものであって、勿論遺構はなく、層位的に捉えられたものではないために、その具体的な目的などについては判らない。

ただし本地点が「塚ノ町」と呼称されていることから、聖視した場としての塚のようなものが存在した可能性が強く、であったならば、中にはそのための供物器としたものも混在していることも考えられるのである。例えば、分布調査においては高环系の飲食器おんじきが出土しており、また今回での耳付きの土瓶類などの非日常的な器からは、その可能性が窺われないでもないと考えられる。

いずれにしても、今回の調査では本遺跡の位置付け、また性格などについてはっきりさせることができなかつたことは言うまでもなく、今後に課題を残してしまったのである。

(渡辺 友千代)

(a)

発掘調査区遠望
(南東から)



(b)

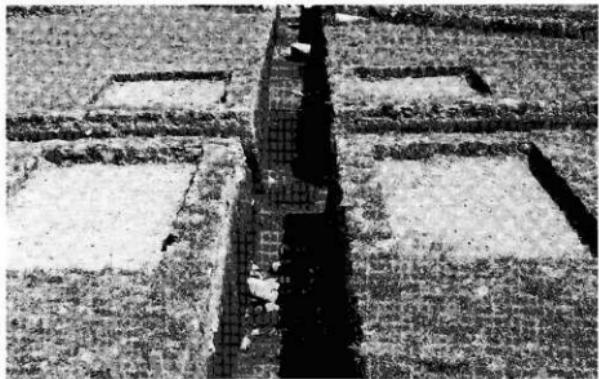
発掘作業風景
(北西から)



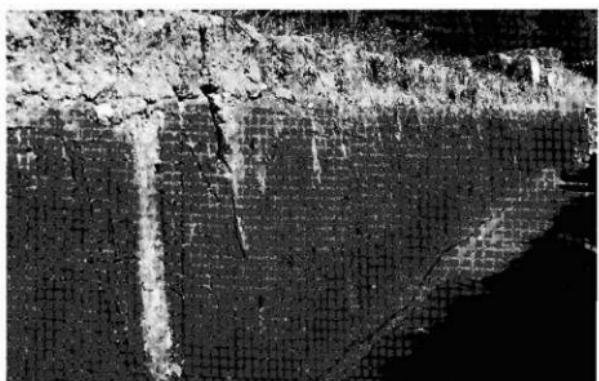
(c)

東・西方向の十字トレンチ
(西から)

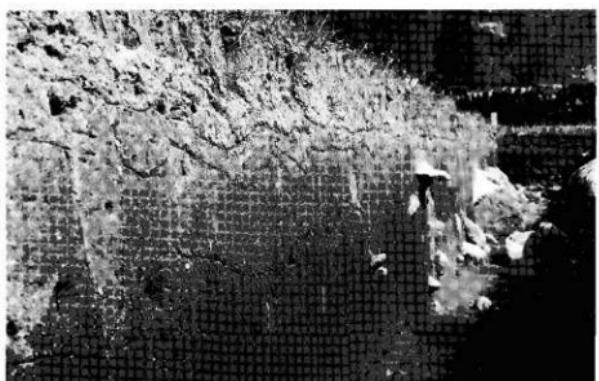




(a) 南・北方向の十字トレーンチ（南から）



(b) 十字トレーンチ（南・北方向）の
北半部の堆積状況（西壁）



(c) 十字トレーンチ（南・北方向）の
南半部の堆積状況（西壁）

(a)

十字トレンチ（東・西方向）の
東半部の完掘状況



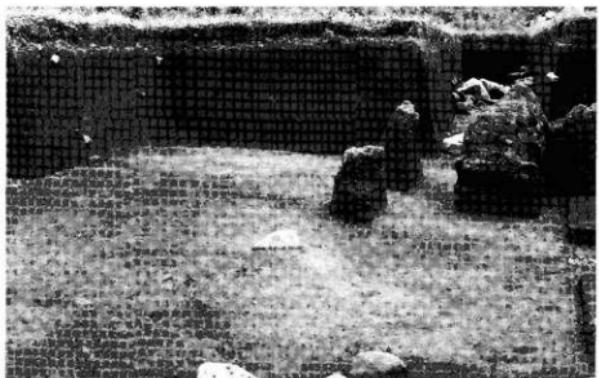
(b)

十字トレンチ（東・西方向）の
西半部に出土した石器



(c)

A区の焼土出土と完掘状況（西から）

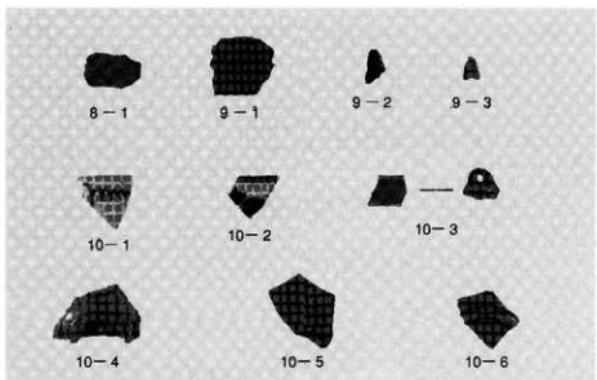




(a)
B区の礫石群（南東から）



(b)
B区の完掘状況（東から）



(c)
出土した縄文土器・石器類・陶磁器類

平成10年3月18日 印刷
平成10年3月25日 発行

匹見町埋蔵文化財調査報告第24集

塚ノ町遺跡

発行 匹見町教育委員会
島根県美濃郡匹見町大字匹見1260
印刷 株式会社 谷口印刷
島根県松江市東長江町902-59